

ヴェネツィアの起源 (1)

Le origini di Venezia

久志本秀夫

1

ヴェネツィアは、言うまでもなく世界にその比を見ぬ水の都を示すイタリア語の名辞であるが、古典ラテン語におけるウエネティア Venetia は、ウエネト人の居住地を意味していた。ウエネト人は、B・C・一〇〇〇年頃、北イタリアに移住してきた民族で、B・C・五世紀よりB・C・一世紀迄に約四百の碑文を残した^①。それを研究した言語学者たちは、ウエネト語をイリュリア語系としていた^②。これはヘロドトスの「イリュリアのウエネト人」^③なる記事にも一致して、従来より有力であったが、最近は、ウエネト語をイタリア語の一系列とみる説も出ている^④。

ウエネト人の主邑はエステ(ローマ時代のアテステ)で、ここはまた女神レティアー出産の神と考えられている―信仰の中心地でもあつた。

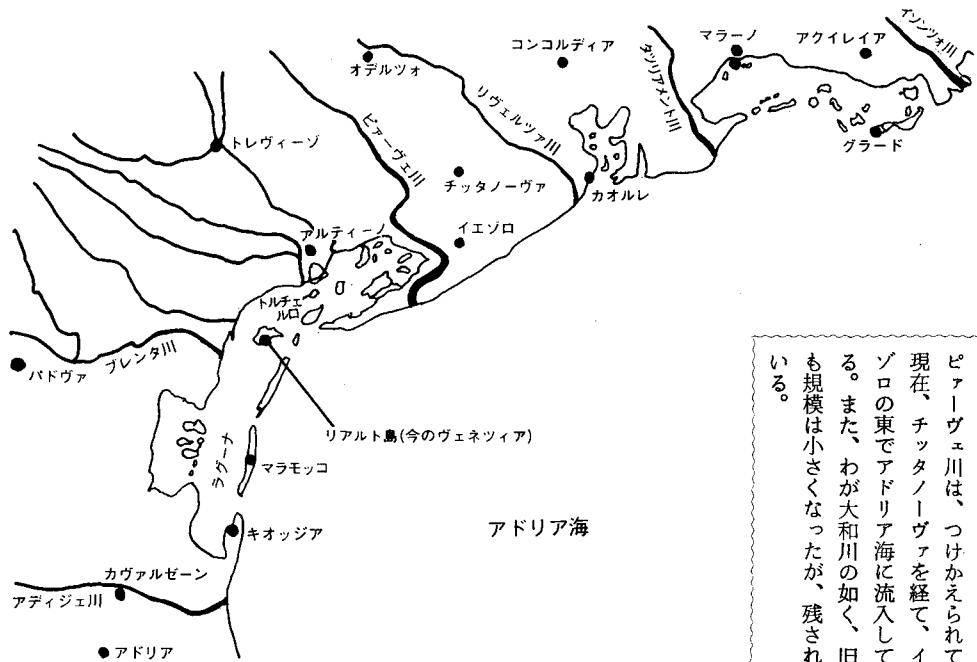
ヴェネツィアの起源 (1)

た。考古学者はエステ文化を四段階に分ち、B・C・二〇〇年頃に終ったとしている。

ウエネト人は、概して争いを好まない民族であり、商業に専念した。なかでも、バルト海沿岸より陸路で運ばれる琥珀は、ウエネティアより積み出されて地中海に出た。またウエネティア産の馬は優秀で、古代ギリシア世界でも著名であった。

ウエネト人は、ローマに対しても事を構えず、B・C・二五五年のガリア戦争ではローマに協力し、B・C・四九年にはローマ市民権を獲得した。またB・C・一八一年には、ローマの植民地アクイレイア^⑤が創設された。アクイレイアはポストゥミア街道の要衝として、後に大きく発展する。

ローマ帝国初代の皇帝アウグストゥス(B・C・三〇―A・D・一四)は、はじめてイタリアの行政区を確定した。それまでは北イタリア全体を含むガリア・キサルピナは、属州とみなされていた。このことはユリウス・カエサルがイタリアとガリアの境界ルピコン川を渡



ピアーヴェ川は、つけかえられて、現在、チッタノーヴァを経て、イエゾの東でアドリア海に流入している。また、わが大和川の如く、旧流も規模は小さくなったが、残されている。

って、はじめて反乱軍となった有名な挿話でも明らかである。現在、カエサルを記念する小さな碑石が、リミニの広場にある。リミニの西、約一三〇キロメートルにフィレンツェがあることから考えると、共和政時代の北イタリアの概念がつかめよう。

アウグストゥスはイタリアを十一の行政区に分かったが、ヴェネチアは東のイストリア半島（現在トリエステを除いて、ユーゴ・スラヴィア領）を含めて、その第十番目のヴェネチア・ヒストリア区となった。この地域は、北はアルプス東山脈が境となつてラエティアとノリクムに接し、西はアッダ川が境となつて第十一区であるトランスパダーナ区と接し、南はポー川が境となつて第八区であるアエミリア区と接し、東はイストリア半島のアルシア川の線を北に延長してパノニアと接した。ヴェネチア・ヒストリア区を構成する民族は多様で、まずヴェネト人がポー川とリヴェンツァ川との間の地域にいた。

主な町としては、パタウィウム（現パドヴァ）、ウイケティア（現ヴィチエンツァ）、アステ（現エステ）、ハトリア（現アドリア）、アルティヌム（現アルティノー）、オピテルグム（現オデルツォ）、ベルヌム（現ベルーノ）、フェトリア（現フェルトレ）があった。次に、ガルダ湖の周辺に本拠があったガリア系のケノマニ人がいた。彼らの主たる町は、ブリクシア（現ブレシア）、ウエロナ（現ヴェローナ）、トリデントゥム（現トレント）、クレモナであった。第三番目に、タッリアメント川とイソントネ川の流域にいたケルト系のカルニ人で、主な町としてコンコルディア、アクイレア、テルグステ（現トリエステ）があった。最後はイストリア半島のイストリア人で主な町にポ

ーラ（現プーラ）があった。この第十区の政庁所在地は、三世紀にア
クイレリアに置かれた。

さて、ウエネティアの南、アドリア海に沿い、約一〇〇キロメート
ルにわたってラグーナ（潟）がある。アドリア海とラグーナとを分つ
ものは、狭い間断なきかのような海岸の紐帯、すなわちリドである。
ラグーナの中には、数多くの島や砂州があり、かつては漁民や水夫の
小屋が散在しているのみであった。ここは本土陸のウエネティアに
対し、海のウエネティアとも称すべき区域であり、ヴェネツィア史の
主要舞台は、やがてこの場に移されることになる。しかし、しばらく
は陸のウエネティアの動きを辿ってみよう。

2

A・D・五世紀より六世紀にかけて、異民族がウエネティアを通過
してイタリアに侵入する。既に四世紀末より五世紀にかけて、ウエネ
ティア・ヒストリア区は衰退の徴候を見せ始めていた。アラリックに
率いられた西ゴート人の侵入（第一回・四〇一年、第二回・四〇三
年、第三回・四〇八年）は、ウエネティアにはさしたる被害を与えな
かったが、四五年のフン族の襲来は甚大な損害をもたらし、特にア
クイレリアは、ほとんど再起不能の損害をこうむった。本土の住民は
ラグーナの島や海岸に避難を余儀なくされ、数々の伝説が生れた。その
最も有名なものは、ヴェネツィアの起源を、この時の避難民が島に定

ヴェネツィアの起源 (1)

着したことをもって嚆矢とするものであるが、この伝説は学問の上か
らは否定されている。^⑩ 昔日の如く繁栄しなかったとはいえ、ウエネテ
ィア・ヒストリア区は、フン帝国崩壊後、徐々に復興し始めた。五世
紀後半イタリアにあいついで定着した二つのゲルマン王国―オドアケ
ルの王国とテオドリックの東ゴート王国―は、ウエネティアをそれぞ
れの王国の重要部分として、その体制内に編入した。

次にビュザンティオン帝国のイタリア再征服が始まる。三三〇年、
コンスタンティヌス帝（三〇六―三三七）が、ローマ帝国の首都を、
黒海とエーゲ海との境に位置するビュザンティオン（現イスタンブー
ル）に移し、自からの名を与えてコンスタンティノポリスと改称して
以来、歴史の中心は西のイタリアより東のギリシアへ移行し始める。
我々が歴史を整理する便宜上、ビュザンティオン帝国とよんでいるも
のは、ローマ帝国の後身である。ビュザンティオンの人たちは、自分
たちを「ローマ人」とよび、皇帝たちはローマ帝国正統の後継者であ
ることを自負した。皇帝ユスティニアヌス（五二七―五六五）のイタ
リア征服事業は、この文脈の上で考えて始めて理解されるであろう。^⑪
また、ヴェネツィア（海のウエネティア）は、ビュザンティオン体制
の中から独自の歩みを始めるので、その相互関係を綿密に跡づけねば
初期のヴェネツィア史の把握は困難となるであろう。

さて、ユスティニアヌスは莫大な費用と人員を投じ、將軍ベリサリ
オス及びナルセスをして、まずアフリカのヴァンダル人、ついでイタ
リアの東ゴート人、最後にスペインの西ゴート人を討たしめ、ほぼこ
れらの地域を制圧した。^⑫

かつてヴァンダル王国に属したコルシカ島とサルデーニャ島は、そのままアフリカの統治下に入った。アフリカは、後期帝政においてはイタリアの全軍長官の下にいたが、独自の全軍長官を持つようになった。^⑬ シチリア島は独立の属州となり、イタリア本土より離れた。イタリアを統治したのはパトリキウスの称号を持つナルセスであった。^⑭ 彼は国境に要塞地帯 *Limnes* を設け、軍司令官に指揮をさせた。^⑮ リミテスは、イタリアではアルプス国境に沿って四つあった。不幸なことにイタリアは、ユスティニアヌス没後三年目の五六八年より、ウェネティア・ヒストリア区を経由して新たな侵入者を迎えることとなった。

ゲルマン人の一派、ロンゴバルド人が記録に現われるのは、A・D・一世紀初頭、エルベ川の下流でローマ軍に敗北した時が最初であった。A・D・一六五年頃、ロンゴバルド人はマルコマンニ人と組んでパンノニアに侵入したが、ローマ軍に撃退された。次にローマの国境に出現したのは、四八七年、オドアケル王国崩壊後のオーストリアを占領した時であった。その後、ヘルール人の王国を滅亡させ、ユスティニアヌス帝の承認の下、パンノニア北部に居住した。ロンゴバルド王アルポイン(五六五頃—五七二)は、アジア系のアヴァール人と同盟してゲピド人の王国を滅ぼし、更に自領となったパンノニアとノリウムをアヴァール人に譲渡して、より豊かなイタリアにその矛先を向けた。

五六八年春、ロンゴバルド人がアルプスを越えてウェネティア・ヒストリア区に乱入した時、イタリア軍長官ナルセスは、皇帝ユスティ

ヌス二世に召喚されて不在であった。そのため、ナルセスが帝国を裏切ってロンゴバルド人を引き入れたという「ナルセス伝説」が生じることとなった。^⑰ ともあれ、ナルセスが設立したりミテスは、簡単に突破された。まずフォルム・ユリイ(現チヴィダーレ。フォルム・ユリイはユリウスのフォルムの意で、ここからフリウリなる地方名が生じた)を占領し、五六九年、第十区の主邑アクイレリアを陥落させ、破壊した。アクイレリアの総大司教パウリヌスは、宝物を持って約十二キロ南のグラード島へ避難した。しかし、パドヴァ、モンセリチェ、マントヴァは防衛に成功した。一方、ヴィチエンツァとヴェローナが占拠された。五六九年九月四日、アルポインはミラノに入城した。またロンゴバルド人は、アルポインの没後、三十五のグループに分かれて南進し、その中からやがて中部イタリアにスポレト公国、南イタリアにベネヴェント公国が出現することになる。^⑱

ウェネティアを通過したロンゴバルドの第一波の後、約三〇年後に再びこの地に圧力が及び、六〇一年、モンセリチェ、六〇三年、マントヴァとパドヴァ、六一五年、コンコルディア、六四〇年、オデルツォとアルティノーが陥落した。

ロンゴバルド人の攻勢は、ウェネティアに重大な影響を与えた。第一は、ウェネティア・ヒストリア区の領土的統一が崩壊したことである。陸のウェネティアは、今やロンゴバルディア、すなわちロンゴバルド人の地となった。(以下、海のウェネティア、すなわちラグーナを中心とした区域をさす場合、ヴェネツィアと呼称する)第二は、本土の住民がラグーナ内の島や海岸に移住を開始したことである。ここ

に真のヴェネツィア史が始まったといえる。

3

一方、ビュザンティオンの皇帝たちは何をしていたのであろうか。ユステイニアヌスの没後、帝国は混乱期を経てヘラクレイオス帝（六一〇―六四一）による再建事業を迎える。その間の諸皇帝は、「ユステイニアヌスの後継者たち」という一つの主題と時期をもって総称されている。皇帝たちは、何よりも東方問題―対ペルシア人、アヴァール人、スラヴ人―に忙殺されて、イタリアを省りみる余裕がなかった。ただマウリキオス帝（五八二―六〇二）は積極的な関心を示し、フランク人を買収してロンゴバルド人を討伐しようと試みたが成功しなかった¹⁹。更にマウリキオスは、イタリアの行政改革でもって危機を乗り越えようとした。すなわち、ラヴェンナ軍事総督領 *Exarchatus* の創設である。

ディオクレティアヌス帝（二八四―三〇五）の改革以来、文官と武官を分離して、権力の集中を防ぐことが鉄則となっていた²⁰。ユステイニアヌス帝の征服事業の後も、この原則は守られた²¹。しかるに今や、一人の為政者に強大な権力が付託されることとなった。

一体、いつ軍事総督領制が採用されたのかは定かでない。史料にはじめて現われるのが五八四年であるから、恐らくこの頃、時の皇帝マウリキオスが制定したのであろうと考えられている²²。

ビュザンティオン帝国よりラヴェンナへ派遣される最高官は、以後すべてエクサルクスの称号を与えられた。彼は民政権と軍事権の双方を掌握し、その政治活動はより自由となった。この制度は、帝国イタリア領の危機に際してとられた臨時のもののようにであったが、危機の永続化ともなつて軍事総督制も永続化した。

ところで、皇帝たちは軍事総督を助けるために大軍を派遣しようとはしなかったが、その理由として次の二つが考えられる。(一)、帝国の東にペルシア人の、北にアヴァール人とスラヴ人の脅威があつて、国境の守備を解くことが出来なかつた。(二)、軍事総督が余りに強力になることを皇帝たちは恐れたようである。特に軍事総督が独自の政策を持つたり、独立の王国をつくることが懸念されたらしい。

この問題を解決するために、マウリキオスは五九七年に遺書を書いた²³。それによると、長男テオドシウスはコンスタンティノポリスと帝国の東の部分を治め、次男ティベリウスはローマにあつて、イタリアとティレニア海の諸島を統治することになっていた²⁴。世界帝国の理念は持続していたのであり、この計画が実現すれば、ラヴェンナ軍事総督領は消滅したであろう。

しかし、六〇二年、ドナウ川守備隊の反乱を契機に、帝国全体が震撼し、百人隊長であったフォークスがマウリキオスを廃して帝位の座にのぼり、先帝の計画は水泡に帰した。フォークスの恐怖政治の時代（六〇二―六一〇）にはもちろんであるが、それを収束したヘラクレイオス帝の時代（六一〇―六四一）にもイタリア政策は存在しなかつた。ヘラクレイオスも東方問題―最初はペルシア人、次にアラビア人

ーに専心して、他を省りみる余力がなかったからである。²⁶⁾ヘラクレイオスを継いだコンスタンヌス二世(六四一—六六八)こそイタリア問題と正面から取組んだ皇帝であった。²⁷⁾彼はスラヴ人とアラビア人の問題を解決した後、六六三年、タラントに上陸して、イタリア再征服を試みる。だがベネヴェント公国攻撃に失敗して、六六三年七月五日、ローマに入った。これは正統皇帝による最後のローマ訪問であった。彼の最初の意図は、ローマに遷都しようという所にあったようであるが、現状では不可能とみて十二日後にシチリアに向って出発した。コンスタンヌス二世はシラクサを皇帝の所在地に選んだが、六六八年九月十五日、従者の一人によって暗殺された。おそらく遷都を嫌ったコンスタンティノポリスの貴族の指令によるものであろう。

コンスタンヌス二世のイタリア遠征の失敗は、イタリアにおけるビュザンティオン帝国の權威の失墜を意味し、ひいてはビュザンティオン領イタリアを支配するラヴェンナ総督領の没落を予告するものであった。

ここで七世紀初頭にラヴェンナ軍事総督が治めていたビュザンティオン領イタリアを総括する。各地方では、ドゥクスまたはマギステル・ミリートウム治下のドゥカートゥスが簇生していた。²⁸⁾

(一) ヴェネツィア・イストリア。後述するように、七世紀はじめには、まだドゥクスの支配を受けていないので、厳密な意味でドゥカートゥスとはいえない。

(二) 狭義のラヴェンナ・エクサルクトゥス。軍事総督の直轄地で、

西の境はポローニャとモテナとの間、北はポー川に沿う線である。八世紀にはフェラーラ・ドゥカートゥスが分離する。

(三) ペンタポリス・ドゥカートゥス。ペンタポリスとはアドリア海岸の五つの都市で、リミニ、セニガリア、ペサロ、ファーノ、アンコーナをいう。ドゥクスはリミニにいた。

(四) ペルージア・ドゥカートゥス。ここには数多くの砦があり、アペニン山脈の重要な峠とフラミニア街道がその区域に入っていた。この街道は、北イタリアのビュザンティオン領、特にラヴェンナとローマとを結ぶ唯一の連絡路であった。

(五) トゥスキア。テヴェレ川上流の北側。

(六) ローマ・ドゥカートゥス。ローマとその近郊。リリス溪谷に至るカンパニアの砦の一部を含む。

(七) ナポリ・ドゥカートゥス。クーマよりアマルフィに至る沿岸諸都市。

(八) カラブリア・ドゥカートゥス。プリアの残存地域(カノーサ、バリ)とカラブリア(イタリア半島南部の東の先端)、ルカニア、ブルツィア(半島南部の西の先端)。

この機会に、ドゥクス *dux* の意義の変遷を述べ、ヴェネツィアの *ドージェ doge* に及びたい。²⁹⁾ ドゥクスは元来、ギリシア語 *δοξος* の対格 *δοξος* に語源をもつラテン語である。もともと案内者の意であったが、転じて隊長、傭兵隊長を意味した。ローマ帝政時代に、ドゥクスという称号は、輝かしい業績をあげた統治者または将軍に贈られた。それは名譽的なものであり、実際の官職ではなかった。ディオクレティア

ヌス帝の行政改革により、ドゥクスは、一又は二つの属州の軍指令官をいうようになった。中世に入って、軍事と民政の分離が曖昧となるに至って、ドゥクスは一領域(ドゥカートゥス)の長となり、軍事権の他に行政、裁判、財政権を手中にした。ドゥクスはビュザンティオン領イタリアのみならず、ロンゴバルド人の征服地の長をいう場合にも用いられる(スポレト公、ベネヴェント公はこの例である)。ヴェネツィアの統領を意味するイタリア語ドージェは、ヴェネツィア語の *doge* より来たもの。ドージェはラテン語ドゥクスより派生した。(また、ヴェネツィアのものもを模したドージェ職が、一三三九年よりジェノヴァ共和国においても出現する。)

ヴェネツィアにドゥクスが登場し、定着するまで幾多の曲節があった。またそれがいつであったか、その様態がどうであったかは、慎重な考証を要する問題となっている。

ヴェネツィアはロンゴバルド人の侵入後、一五〇年間、独立していたとの伝承があるが、この伝承を否定し、ラヴェンナ軍事総督領に直屬していたことを証する決定的な史料がある。それは、サンタ・マリア聖堂への奉獻碑文で、年代は六三九年九月〜十月である。聖堂は、一般に今なおトルチェルロ島にあるビュザンティオン様式のそれであるとされている。以下、この一般的な立場より史料を解釈するペルトゥーシの説を紹介する。^②この碑文で興味あるのは、奉獻者の名で、「ヘラクレイオス帝の保護の下、エクサルクス、イサアクの命により、マギステル、マウリキオスの尽力を通じて」とある。碑文が語るものは、ヴェネツィアの独立ではなく、ラヴェンナへの従属であり、

マギステル・ミリトゥムが行う軍政である。更に、ペルトゥーシは六三九年頃、トルチェルロは繁栄していたらしいこと、そしてマギステル・ミリトゥムはトルチェルロに居住していたこと、すなわち、トルチェルロこそ、政庁所在地であったとする。

さて、ヴェネツィア史の碩学チェッシは、かつては奉獻碑文がトルチェルロの聖堂のものであるという説を承認していたが、奉獻者に司教の名がないことから出発して別の説を立てた。^③彼は、本土における最後の拠点オデルツォ陥落の年を六三九年とし、その住民が無名の島に移住したが、のちに町となり、キウィタス・ノウァ(「新しい町」の意、イタリア語でチッタノーヴァ)と名づけられたという。その移住を記念して建立されたのが、サンタ・マリア聖堂であり、マギステル・ミリトゥムがイニシアティブをとっているのが碑文よりはっきり分るといふ。トルチェルロに政庁が存在したことはなかったし、トルチェルロの聖堂は、ムラーノ島やグラード島と同様、聖職者がイニシアティブをとって建立したものにちがいないからという。

実際、オデルツォ陥落後、政庁所在地はただちにチッタノーヴァに移されたので、チェッシの立論にも聞くべきものがある。(ペルトゥーシも、マギステル・ミリトゥムはトルチェルロに数年いたのちチッタノーヴァに移ったとしている。)^④

現在チッタノーヴァは、海より約十キロ内陸へ入った位置にある。アルプスより流れ出た川は、アドリア海へ流入する過程において東へ向う傾向がある。川が運んでくる沈泥は、徐々に推積し、結果としてロンゴバルディア平野は東へ拡張されている。ラヴェンナ、アドリ

ア、アクイレイアの諸都市は、かつて港を持っていたが、現在は何キロメートルも内陸に入っている。陸の形成は、千年間に約三マイルと見積もられている。チッタノーヴァはそのような町の一つである。

チッタノーヴァは九世紀以降につけられた名で、それまではヘラクレイオス帝に敬意を表してヘラクレーアと称していた。³⁵⁾

ともあれ、チッタノーヴァに政治の中心が移るに及んで、ヴェネツィア史は新しい段階を向えることとなった。 (未完)

(大学音楽学部助教授)

(注)

- ① ラテン文字とヴェネト文字との碑文が残されているが、ヴェネト文字は非常に特殊で、エリスで使用された西ギリシア文字との比較も試みられた (Pauli, C., *Die Veneter und ihre Schriftdenkmäler*, Leipzig [1891], 229)。しかし現在は B・C・六世紀末にポル川渓谷に定着したエトルス人の文字に影響を受けたという説が一般的になっている。 Cf. Beeler, M.S., "Venetic Language", *Encyclopaedia Britannica*, (以下 EB と略称) 22 (1967), 952.
- ② イリュリアはバルカン半島の北西部をさし、先史時代よりイリュリア人が住んでいた。インド・ヨーロッパ語の一系列としてのイリュリア語については Beeler, M.S., "Illyrian Language" *EB*, 11 (1967), 1097-1098 を参照。ヴェネト語をイリュリア語系としたのは注①のパウリの研究が最初であり、以後、約六十年間、イリュリア語として分類されてきた。例えば、Salmon, E.T., "Veneti", *Oxford Classical Dictionary* (以下 OCD と略称), Oxford (1957), 941 も、ヴェネト語をイリュリア語系としている。
- ③ ヘロドトス「第一巻」一九六。 Cf. Godley, A.D., *Herodotus*, I, Loeb Classical Library, London. (1966), 246. ヘロドトス「歴史」上巻 (松平千秋訳) 東京、一九七三年、一四六頁。

④ 他に「ラテン語系」系統不明説もある。 Cf. Beeler, M.S., "Venetic Language", *EB*, 22 (1967), 952.

⑤ バルト海沿岸、特にデンマークより琥珀が輸出され、地中海より青銅が見返り物資として来たという。琥珀の道は、三つのルートが考えられるが、東のルートは鉄器時代に開拓されたもので、ダンツィヒより出発して(その結果デンマークの独占は終った)ヴェネチアに達し、特にイタリアのアドリア海沿岸側に琥珀を豊富にもたらした。 Cf. Randall-Maciver, "Amber", *OCD*, 42. なお注⑥も参照。

⑥ B・C・一八六年、アルプスの北より来たガリア人がこの地を占拠したが、ローマは彼らを追い、ラテン人の植民地をつくった。同じような侵入を防ぐため、また近隣の金鉱を利用するためであった。アクイレイアは、ジュリアン・アルプスを越える道を掌握していたので、軍事的に重要であったが、商業と産業の中心地にもなった。アクイレイアの琥珀貿易は殊に重要であった(ストラボン、第四巻、二〇七以下。第五巻、二一四)。ローマ帝政時代には「第二のローマ」と呼ばれたこともあった。古代世界の大都市の一つであったが、四五二年のアッティラの侵略を境として衰退に向った。 Cf. Salmon, E.T., "Aquilina", *OCD*, 75.

⑦ ヴェネチア・ヒストリア区の西端の都市クレモナが中心となる道で、ここからデルトーナを経由してジェノヴァへ行く道と、マントヴァ、ヴェローナ、ヴィチエンツァ、オデルツォを経由してアクイレイアへ通じる道に分かれる。アクイレイアより更にジュリアン・アルプスを越えてパンノニアに入る。要するにアクイレイアにはヴェネチアの幹線であったポストゥミア街道の他に諸道が集中していたので、交通の要衝となったのである。

⑧ Ashby, T., "Italy-Consolidation of Italy", *EB*, *Fifteenth Edition*, 15 (1911), 26-27.

⑨ B・C・四九年、カエサルが渡ったルビコン川の位置については、ポッカチオの時代より今日まで論争的となっている。現在のルビコン川は「リミニ」の西北約十二キロメートルの地点でアドリア海に流れこんでいる。ともあれ、カエサルはルビコン川を渡ってリミニへ入り、ローマ時代の広場

(現在「三人の殉教者の広場」と呼ばれている)で、第十三軍団の兵士に演説したところ。 Cf. *Emilia e Romagna*, Milano (1957), 575—576.

⑩ Cessi, R., *Venezia Ducale, I. Duca e Popolo*, Venezia (1963), 18.

(以下 CESSI, I と略称) 「ベネチアの時代においても、またその後も長期間にわたって、市民生活と政治生活は、ますます弱く混乱したリズムではあったが、脈打つことをやめなかった」

⑪ ユスティニアヌス一世に関する文献は非常に多いが、簡明なものとしては、次の二点がある。

Ostrogorsky, G., *History of the Byzantine State*, tr. by J. Hussey, Oxford (1968), 68—78. (以下 OSTROGORSKY と略称する)

Hussey, J.M., "Justinian I", *EB*, 13(1967), 163—165.

同、同ハンサム・クロウ・ライナー・ブリタニカ社の Bury, J.B., "Justinian I", *EB*, Eleventh Edition, 15(1911), 596—602. の方は大へん詳しく。更に詳細なものは、同著者による

Bury, J.B., *History of the Later Roman Empire from the Death of Theodosius I to the Death of Justinian*, 2 vols, London (1923). (以下 BURY と略称)

の第二巻は、ほとんど全巻がユスティニアヌス一世の時代について述べられてくる。最近の研究としては

Rubin, R., *Das Zeitalter Justinians*, I

がある。

我が国ではユスティニアヌス時代の本格的な研究は、まだ出ていないが、次の二点が概略をつかむのに役立つであろう。

渡辺金一「ユスティニアヌス」世界歴史事典 十九、東京、一九五三年、五九六—六〇二。

弓削達「末期ローマ帝国の体制」岩波講座世界歴史 七、東京、一九六九年、一九—五二。特に第四節「ユスティニアヌスの時代」。

⑫ スリサリオスに関しては

Rosser, T.A., "Belisarius", *EB*, 3(1967), 438—439.

ヴェネツィアの起源 (1)

渡辺金一「ベリサリオス」世界歴史事典 十七、東京、一九五三年、一九。

ナルセスに関しては

Hussey, J.M., "Narses", *EB*, 16(1967), 35.

渡辺金一「ナルセス」世界歴史事典 十四、東京、一九五三年、一五七。をそれぞれ参照された。

ヴァンダル王国征服は、五三三年—五三四年、東ゴート王国征服は、五三五年—五五五年(この間に指揮官はベリサリオスよりナルセスに代った)、南スペイン征服は、史料の不足で問題はあがるが、五五〇年頃のものである。 Cf. BURY, II, 287.

⑬ BURY, II, 140.

⑭ BURY, II, 281—284.

⑮ Diehl, C., "Justinian. The Imperial Restoration in the West", *Cambridge Medieval History* (以下 CMH と略称), 2, Cambridge(1967), 21. *Limites* の単数形 *limes* は、元來道路を意味したが、やがて壁のある軍用道路の意となり、転じて国境、更に国境防衛線の意味となった。国境を整備したのはアウグストゥス帝に始まるが、それを永続的な防衛線にしたのはユスティニアヌス帝(八一—九六)であった。 Cf. Momigliano, A., "Limes", *OCD*, 505—506.

Diehl, C., *op. cit.*, 21 では、アフリカのリミテス(トリポリタナ、ビュサセナ、ヌミディア、マウレタニア)はあげられているが、イタリアの方はあげられていない。なお、アフリカのリミテスに関しては、Diehl, C., *L'Afrique byzantine, hist. de la domination byzantine en Afrique* (533—709), Paris(1896)のりの要約が BURY, II, 148—150 である。

⑯ ロンゴバルド人に関しては

Pepe, G., *Il medio evo barbarico d'Italia*, Torino(1963), 106—253.

(以下 PEPE と略称) Hartmann, L.M., "Italy under the Lombards", *CMH*, 2(1967), 194—221.

八一

がある。

- ⑭ Hartmann, L.M., *op. cit.*, 196.
ナルセスの召換については「ローマ市の人たちが、ビュザンティオン人の下にいるよりゴート人の奴隷になる方がましである」と、皇帝・皇后に訴えた為らしいという (PEPE, 108)。
ナルセス伝説は、史料解釈の上でも、年代学的にも未解決の問題である。その代表的な文献は「CESSI, I, 27, n. 6を参照。
- ⑮ Hartmann, L.M., *op. cit.*, 197—198.
アルボインは五七二年に殺害、彼を継いだクレフも五七四年に殺害された。その後、五八四年にクレフの子、アウタリが北伊のロンゴバルド王になるまで空位であった。この間に、ファロアルドに率いられる一隊がスポレトに、ゾットに率いられる一隊がベネヴェントに定着し、空位期を利用して独立した。
- ⑯ Hartmann, L.M., *op. cit.*, 199—200. マウリキオスは「アウストラシアのキルデベルト王に五万ソルドゥスを送ったという。
- ⑰ BURY, I, 25ff. に「ディオクレティアヌス帝が制定した行政、軍隊、財政機構がよくまとめられている。
- ⑱ しかし「ユスティニアヌス帝はディオクレティアヌス帝が峻別した民政権と軍事権を、多くの場合結びつけた。 Cf. BURY, II, 339. 例えば「ナルセスはイタリア軍指揮官であると同時に総督の役割を果たした。だが彼の側らには、知事プロコンスラトのアンティオコスプロコンスラトがいた。興味あるのは、アンティオコスの称号が、文官の最高である近衛知事プロコンスラトではなかったことである。 Ibid, II, 282.
- ⑳ OSTROGOSKY, 80, n. 2.
Ostrogorsky, G., "L'exarchat de Ravenne et l'origine des thèmes byzantins", *VII Corso di cultura sull'arte ravennate e bizantina*, I, Ravenna (1960), 101.
軍事総督領に関する基本的文献は次の二点である。
Diehl, C., *Études sur l'administration byzantine dans l'exarchat de*
- Ravenna (568—751), Paris (1888).
Hartmann, L.M., *Untersuchungen zur Geschichte der byzantinischen Verwaltung in Italien* (540—750), Leipzig (1889).
⑳ Teophyl. Simocates, *Hist.*, VIII, 11, 7. この遺書は「マウリキオス帝の没後」クラクレイオス帝の統治時代の初期に発見されたらしい。
Cf. Goubert, P., *Byzance avant l'Islam*, I, *Byzance et l'Occident sous les successeurs de Justinien*, Paris (1951), 10—11.
- ㉑ OSTROGORSKY, 80—81.
⑳ 杉村貞臣氏は「我が国では数少ないビュザンティオン学者として、特にヘラクレイオス帝を中心の一連の研究を發表されている。次の三論考は、ヘラクレイオスに関連して多くのことを我々に教えてくれる。」「フォーカス時代とヘラクレイオスの即位」*関西学院史学*、七、一九六四年、一五三—一六七。「ヘラクレイオス王朝におけるビュザンティオン世界の成立」*史学雑誌*、七九の十二、一九七〇年、一—三七。「ヘラクレイオス帝のペルシア遠征」*オリエンツ*、八の三〇四、一九七二年、八七—一二〇。また杉村氏は、未発表の「ユスティニアヌスの後継者時代考」なる論文を筆者に見せて下さった。その御厚情に対して謝意を表する次第である。
- ㉒ Pertusi, A., "L'Impero Bizantino e l'evolvere dei suoi interessi nell'alto Adriatico", *Le origini di Venezia*, Firenze (1964), 65. (以下 PERTUSI と略称) ヘルトウーシの指摘は「ビュザンティオン皇帝のイタリア政策という点を強調し、示唆を含むものがある。なお、コンスタンス二世のイタリア遠征に関しては、杉村貞臣「コンスタンス二世のローマ訪問とシチリア移住」*関西西洋史論集*、二、一九七二年、一一—一二、がある。氏は「ビュザンティオンの諸皇帝が『ローマ人の皇帝』とよばれていたことから、それは「単なる過去への回想だけでなく、ローマを含むイタリアあるいは帝国領域西部を自己の支配下に編入しようとする一種の使命観をいっていたのではないであろうか。それが歴代諸皇帝の対西方政策に現われ、コンスタンス二世もその一人であった」(七頁)と、「ローマ人の皇帝」という名称がもたらす心理的影響にも言及されている。

- ⑳ エステイニアヌス時代までは、マギステル・シリトゥム *magister militum* は文字通り全軍長官の意であったが、後出のサンタ・マリア聖堂の碑文に見られるように、この頃はラヴェンナ軍事総督の下にいた軍政担当者の意味になっていた。従って以下、マギステル・シリトゥムと原語のままに出しなす。
- ㉑ Hartmann, L.M., "Imperial Italy and Africa: Administration", *CMH*, 2(1967), 228.
- ㉒ *Dizionario Enciclopedico Italiano*, 4, Roma (1970) の "duca" p. 205, "duce" p. 206, "doge" p. 145 の項目中の要約した。
- ㉓ Cessi, R., "Venice to the Eye of the Fourth Crusade", *CMH*, 4, Part 1(1966), 253. 出典は「助祭^{ノボト}ジョヴァンニ」の年代記である。助祭ジョヴァンニは、統領ビエトロ・オルセオロ二世(九九一—一〇〇九)の司祭で、「一〇〇八年までのヴェネツィア年代記」*Chronicon Venetum usque ad annum 1008* を書じた。ジョヴァンニの生没年代は不明。Cf. "Giovanni Diacono", *Dizionario Enciclopedico Italiano*, 5(1970), 405.
- ㉔ *PERTUSI*, 66—67.
- ㉕ *CESSI*, I, 68—71.
- ㉖ *PERTUSI*, 67.
- ㉗ "Venice", *EB, Eleventh Edition*, 27(1911), 995.
- ㉘ "Cittanova", *Dizionario Enciclopedico Italiano*, 3(1970), 262.
- ㉙ ラクレーアはラテン語「イタリア語ではエラクレーア *Braceia* とさう。